

日本医学会分科会活動報告

特定非営利活動（NPO）法人日本口腔科学会
理事長 中村誠司

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会の独自の活動を以下に留意して記載をしてください。

a. 特に学術的に重要と考えられるもの

① 学術活動の目的と特徴

本学会は、日本医学会第31分科会として、「広く市民に対して、学術集会の開催等による口腔科学の研究及び討議を通して、医学の進歩と発展に貢献し、学術文化及び医療福祉に寄与すること」を目的として活動している。診療領域としては口腔科を担い、職種や領域に捕らわれない幅広い専門性を有し、学問領域としては口腔科学を担い、歯学はもちろんのこと、医学にも関連する学際的な領域を包含し、さらに歯学を支える基盤学会としての役割を果たすとともに、医学と歯学の橋渡しの役割を担っているのが特徴である。

② 定期的な学術活動

総会・学術集会と6つの地方部会（北日本、関東、中部、近畿、中国・四国、九州）をそれぞれ年1回開催し、総会・学術集会に際しては、日本学術会議歯学委員会との共催でシンポジウムを開催するなど、関連機関・学会との連携・交流を積極的に行った。

学会誌としては、国内誌と国際誌を出版し、日本口腔科学会雑誌を年4回、Oral Science International (OSI) を年2回、単行本である Oral Science in Japan (OSJ) を年1回出版した。

③ 口腔の健康の重要性の啓発

近年、歯周病などの慢性感染巣が、糖尿病、早産・低体重児出産、動脈硬化、関節リウマチ、非アルコール性脂肪性肝炎、アルツハイマー病などに関連すること、さらに口腔の衛生状態が誤嚥性肺炎、人口呼吸器関連肺炎、手術巣感染などに関連することが示唆されている。本学会は、2018年に新たに保険医療に加えられた周術期等口腔機能管理の有用性を示すために多施設共同研究を実施し、歯科的口腔機能管理が誤嚥性肺炎、人口呼吸器関連肺炎、手術巣感染などの予防に繋がることのエビデンスの集積を行い、その成果を公表し、口腔の健康の重要性の啓発に努めた。

b. 国際的な役割

2010年から前述の OSI と OSJ という2つの英文誌を出版し、国際的な情報交換な

らびに発信に努めた。

前述の日本で開始された周術期等口腔機能管理は世界初の医療保険制度として国際的に注目されており、本学会が関わる口腔の健康の重要性を示す研究は世界を牽引している。

c. 社会的な意義

2017年に、口腔領域の医療に関連する基礎的・臨床的知識ならびに診療技能を有する口腔科学研究者・口腔医療担当者を養成し、以って国民の健康増進に寄与することを目的として専門医制度を開始し、現時点で認定医は994名、指導医は430名、研修施設は205施設を認定した。この専門医制度の開始に伴い、従前は総会・学術集会の際に年1回開催していた教育研修会を各地方部会においても実施することとし、生涯教育体制を強化した。

また、ICD-11改定、診療報酬改定、オンライン診療に関する検討会議などに積極的に参画した。

d. 学会運営上留意している点

診療領域としては口腔科を、学問領域としては口腔科学を担っている学会として、歯学の学際的な領域を包含し、歯学を支える基盤学会としての役割を果たすとともに、医学と歯学の橋渡しの役割を担うことに留意している。昨今では、歯学の学際的な領域を網羅するとともに、学会会員数の増加を目的として、2020年からRising Scientist賞と新人賞を新設し、若手会員の増加と活性化を図った。

2020年と2021年はコロナ禍で通常の対面の集会の開催が困難であったが、十分な感染拡大対策を施した上で、安易に延期あるいは中止といった対応をしないとといった開催指針を示すとともに、完全オンライン開催あるいはハイブリッド開催のための資金的援助を行うために助成金を捻出し、学会開催という重要な学術的活動を停滞させないように配慮した。

II. 日本医学会分科会にふさわしいと考えられる他の分科会との連携による活動

現時点では他の分科会との連携による活動はないが、全体との連携に関しては、特に昨今のコロナ禍の諸問題では重要な感染経路である口腔科も関わるべきだと判断し、「COVID-19 expert opinion」と「COVID-19 ワクチンの普及と開発に関する提言」には本学会として積極的に関わった。